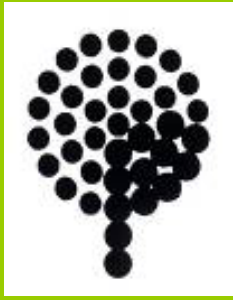


NEWSLETTER



No.61 September 2024 : 令和6年9月 第61号
「ニュースレター 61号」
第32回 地球環境シンポジウム案内号 v.1

EARTH & FOREST

公益社団法人 土木学会 地球環境委員会

***** 目 次 *****

巻頭言 「地球環境委員会の SWOT 分析」

地球環境委員会 委員長 (東北大学) 風間 聡 P. 2

副委員長のご挨拶 「副委員長の挨拶」

地球環境委員会 副委員長 (筑波大学) 津旨 大輔 P. 4

幹事長のご挨拶 「幹事長の挨拶」

地球環境委員会 幹事長 (兵庫県立大学) 中嶋 一憲 P. 6

副幹事長のご挨拶 「副幹事長ご挨拶」

地球環境委員会 副幹事長 (国立環境研究所) 岡 和孝 P. 7

第32回地球環境シンポジウムのご案内

実行委員会委員長 (熊本県立大学) 岩見 麻子 P. 9

第31回地球環境シンポジウムのご報告

前実行委員会委員長 (名古屋大学) 白木 裕斗 P. 11

委員だより v.12 「福島WG、熊本WG および、政策研究小委員会からの活動紹介」

・「福島WGの活動紹介」 委員 川越 清樹 (福島大学) P. 13

・「熊本WGの活動紹介」 幹事 岩見 麻子 (熊本県立大学) P. 15

・「政策研究小委員会の活動紹介」 委員 山崎 智雄 (エックス都市研究所) P. 17

ニュースレター第61号発行ご挨拶 広報小委員会委員長 大西 文秀 (ヒト自然系GISラボ) P. 19

地球環境委員会 令和6年度の構成 P. 20

地球環境委員会からのお知らせ P. 21

巻頭言 「地球環境委員会の SWOT 分析」

地球環境委員会 委員長 風間 聡（東北大学大学院工学研究科）

委員長を仰せつかってから1年が経ちました。昨年、この稿で説明したワーキンググループや小委員会が活発に活動しています。地球環境委員会の成果も大きく増えることとなりました。それぞれが大変魅力ある内容となっており、全てに参加できないもどかしさがあります。近い将来、これらの活動から多くの研究成果が発表され、さらに地域へ広く活用されることを期待しています。他方、土木学会は分野横断の第VIII分野を設置し、この中に地球環境委員会を加えました。分野横断といいますが、地震工学や地下空間との親和性は高いといえず、活動の足枷になる危惧があります。学際性や分野横断の活動に失望することないように気をつけなければなりません。



こうしたことを考えて地球環境委員会の SWOT 分析を独断でしてみたいと思います。対象は論文発表を中心にみた研究成果と研究活動としています。競合は他の委員会や学会を想定しています。

強み：学際性。地球規模研究。速い意思決定。

弱み：第一の委員会になっていないこと。少ない委員・幹事数。少ない論文投稿数。

機会：気候変動影響の顕著化。適応センターの設置。人口減。

脅威：トップダウン型研究の増加。人文・社会科学研究者の減少。国際学術誌の競争激化。

地球環境は大変広い領域です。海外の事例研究が他委員会の特集号^{*1}で多く発表されていますが、新技術がないと採択されない場合も多いです。観測や実験、海外事例の論文について読者に使えるものがあると、似たものが存在しても私は査読を甘くする傾向にあります。地球環境委員会が積極的に海外事例研究を受け付けばインベントリーとしての役割を担えます。これは地球環境委員会が「強み」を生かして積極的展開できることの1つだと思います。「弱み」として研究者の第一委員会（または学会）になれないことがあります。そのため、参画する人がゼロになるリスクを抱えています。少なくとも委員・幹事は地球委員会の利点を理解するとともに委員会活動に関わって頂きたいと思っています。利点を知ってもらうために広く地球環境委員会の広報が必要です。これについては改善の余地が大いにあります。

国は気候変動問題や人口問題に強い対策を打っています。これに対する土木分野の貢献は大きいものがあります。委員会として環境研究総合推進費や科研費の発表の場として利用してもらい、この機会を逃さない活動が望まれます。一方、国際化が進むと国内学会の発表や投稿の意欲が減退します。他の委員会でも

¹ 土木学会論文集特集号のこと。各研究委員会が出している論文集。地球環境委員会の場合、地球環境シンポジウム論文集（研究論文）のこと。旧 A 論文。

同様の傾向が見られています。こうした脅威に抗うことは困難であるので、国内学会としての価値を積極的に生み出す必要があります。極端な話として英文論文を廃して、和訳の論文や事例報告などをメインにすることが考えられます。

相反することとして、学際性が他の研究者に理解されにくい弱みになる場合があることです。これが第一委員会にならないことに関連しています。また、論文発表をためらうこともあるでしょう。一方、第一委員会で得られないコメントや他分野の手法を得る機会があります。この利点が知られていないようです。発表セッションをテーマ毎にしない、というようなこともあっていいかもしれません。

委員会の視点と研究者の視点によって見方が変わります。委員会は査読論文のレベルを維持しようとしませんが、研究者は異分野との交流の場として一次分析的なものや事例紹介的のものを共有したい場合があります。また、委員会は学際性を奨励したいかもしれませんが、研究者は専門性を深化したいかもしれません。専門と応用を包含したテーマ別の論文募集もありえるかもしれませんが、おそらく数は集まらないので工夫が必要です。

実はここで書いたことは花崎レポート（令和4年度集中討議とりまとめ）にほとんど書かれています。レポートを踏まえてクロス SWOT 分析を行えば、より積極的に取るべき委員会活動が明確になります。先に述べた国際事例研究の採択はその1つです。こうしてみても、思いのほか地球環境委員会は「強い」ようにみえます。どうも委員会が持つ能力や機能をうまく使えていないようです。皆が使えるプラットフォームになるよう改めて努力したいと思います。

最後に土木学会論文集の動向についてお知らせします。ここ数年、土木学会論文集編集委員会は論文集の改革を進めています。地球シンポジウム講演集の紙媒体を無くしたこともこの一つです。その最後に ESCI²の申請、受理がありました。しかし、幾つかが国際基準に合致しないため返却となっています。Journal of JSCE（英文誌）が ESCI になるように、コンサルタントに要項などの見直しを依頼しています。もし、地球環境シンポジウムの英文論文（特集号英文論文）が ESCI の掲載を目指すなら、特集号和文誌と別な要項とルールが求められます。この流れに乗るのか、乗らないのか、いずれにしても地球環境委員会の将来に影響する大きなことです。皆さまには地球環境委員会の目指すべき方向性を積極的に議論して頂ければ幸いです。

² Emerging Sources Citation Index (ESCI). ESCI は国際的な基準に達し、かつ今後、質の向上が見込まれるジャーナルを集めたデータベース。SCI になると Impact Factor が付与される。SCI になるためにはまず ESCI に掲載される必要がある。

副委員長のご挨拶「副委員長の挨拶」

地球環境委員会 副委員長 津旨 大輔（筑波大学）

筑波大学の津旨大輔です。昨年度より、副委員長を務めさせていただいております。

2023年10月に電力中央研究所から筑波大学放射線・アイソトープ地球システム研究センターへ転職いたしました。これまでは車で5分の距離で通勤していましたが、筑波大学では現在、3本の電車とバスを乗り継いで、1時間30分以上の通勤時間がかかっています。つくばエクスプレスの開通によって「陸の孤島」という印象は多少緩和されたと言われてはいますが、それでも依然としてアクセスは決して良いとは言えません。お近くにお越しの際にはぜひお立ち寄りください、と気軽に申し上げにくい場所であることも事実です。もうすぐ1年が経とうとしており、長時間の通勤にはだいぶ慣れてきましたが、筑波大学での新しい業務にはまだまだ完全に慣れたとは言えません。



ただ、新たな環境の中で、若い学生と接する機会が多くなったことは、大きな刺激になっています。地球環境委員会においても、若手が主導するプロジェクトや活動が徐々に活発化しており、今後のさらなる発展に大いに期待しています。若手研究者や学生の力を最大限に活用しながら、新しい研究の方向性を模索していきたいと考えています。

一方で、電力中央研究所の客員研究員の立場も継続しており、研究内容としては、福島第一原子力発電所事故やALPS処理水の海洋放出に関する影響評価といった、これまで取り組んできた海洋中の放射能動態に関する研究を進めています。事故から13年が経過しましたが、今後も長期的に追跡が必要な重要なテーマであると考えておりますが、EGUやJpGUなどの関連学会での活動も縮小し、研究費も取りにくい状況となっています。地球環境シンポジウムでも草の根活動は続けたいと考えております。

さらに、筑波大学では、放射能環境動態・影響評価ネットワーク共同研究拠点（ERAN）で運用している「環境放射能データベース（ERAN Database）」の管理も担当しています。ERAN Database (<https://www.ied.tsukuba.ac.jp/database/index.html>)は、2019年7月25日に設立され、福島第一原子力発電所事故に関連するデータをDOI(Digital Object Identifier)付きで後世に残すための取り組みです。このデータベースでは、主に放射能に関する環境データを収集していますが、最近ではシミュレーション結果や環境中の化学物質データなど、収集対象を広げています。このデータベースは、学術的なデータの保存と共有を促進し、後世の研究者が過去のデータにアクセスして新たな研究に活用できるようにするための重要なツールです。

また、2023年10月に開催された総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）では、「公的資金による学術論文等のオープンアクセスの実現に向けた基本的な考え方」が発表されました。これにより、2025年度

以降、新規公募される競争的研究費制度によって生み出された査読付き学術論文およびそれに関連する根拠データは、即時にオープンアクセス化されるべきとされています。つまり、今後は、学術論文だけでなく、その基となるデータもオープンにすることが求められるということです。ERAN Databaseも、このオープンアクセス化に対応するため、根拠データの公開を進めています。データのオープンアクセス化に興味のある方は、ぜひご一報いただければ幸いです。

地球環境委員会に関連する幅広い研究活動においても、貴重な根拠データが次々と生み出されています。この機会に、データのオープンアクセス化やその活用方法について、より深い議論が行われることを期待しています。私たちの研究活動の成果を社会に還元し、次世代の研究者がそれを活用して新たな発見を行うことができるよう、データの共有と利用を推進していくことが重要です。

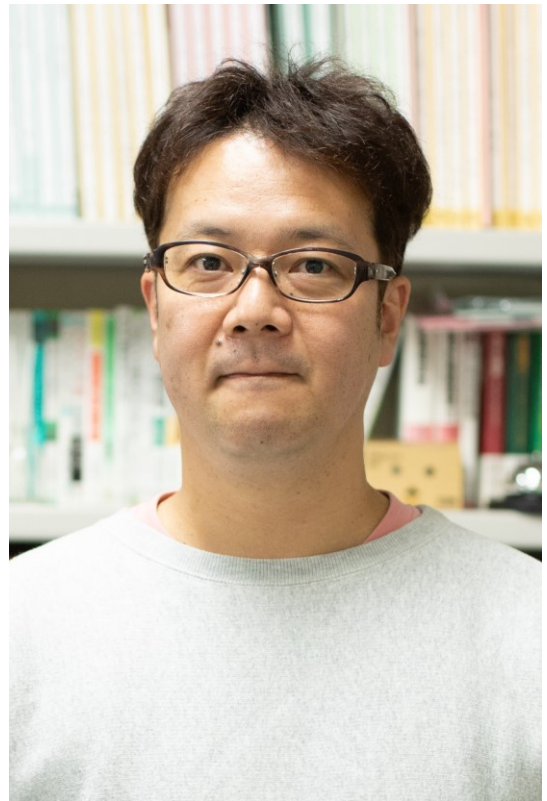
引き続き、地球環境委員会の活動について、よろしくお願い申し上げます。

幹事長のご挨拶「幹事長の挨拶」

地球環境委員会 幹事長 中嶋 一憲（兵庫県立大学環境人間学部）

兵庫県立大学の中嶋一憲です。2023年度より地球環境委員会の幹事長を拝命し2年目となりました。昨年度は地球環境研究論文編集小委員会や表彰小委員会の委員だけでなく、環境賞選考委員会や第VIII分野連絡会の委員を兼任し、また新たな経験をすることになりましたが、これまでと同様に多くの皆さまから支えられ一年間やりきることができました。この場を借りて、皆様には心より御礼申し上げます。

昨年度からの大きな変化としては、今年度より地球環境研究論文集（土木学科論文集G（環境））にてEditorial Managerによる編集作業が始まったことが挙げられるかと思えます。これまでと同じ査読プロセスにもかかわらず、システム変更による慣れない作業が続く中、全ての委員が無事に編集作業を終えることができたのは、論文編集小委員会の岡幹事長が尽力し、丁寧なサポートをしてくださったおかげに拠るところです。もちろん、土木学会本部による多大なサポートにも感謝しています。



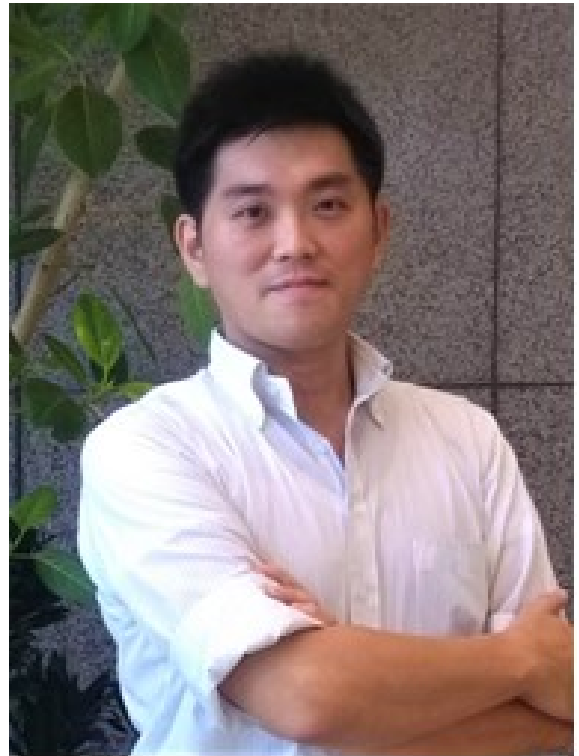
第32回地球環境シンポジウムにおいて、大会実行委員会は熊本県立大学の岩見麻子委員長を筆頭に、糠沢桂副委員長（宮崎大学）、天野弘基委員（東海大学）、鈴木章弘委員（北海道大学）、佐藤琢磨委員（熊本県立大学）、中川啓委員（長崎大学）、岡委員（国立環境研究所）、桃井氏（土木学会）、そして私で組織され、現在準備を進めています。今年度は研究論文53編、研究報告47編（うちポスター発表34件）の投稿があり、昨年度の滋賀県立大学での開催に引き続き、盛況な大会になることが予想されます。また、今年度も鈴木章弘委員（北海道大学）を中心に若手勉強会が開催され、研究発表や議論だけでなく、若い研究者や学生間のネットワークが広がる機会となることが期待されます。そして、もう一つの目玉として、熊本県の黒川温泉を調査対象地としたエクスカージョンが開催されます。このエクスカージョンは、昨年度に地球環境委員会の新たな試みの一つとして始まった熊本WGを契機として、岩見麻子委員長を中心に企画されたものです。この企画はこれからサーキュラーエコノミーを軸とした地域づくりを考えていく上で有意義な機会となり得ること間違いなしです。このように、今年の地球環境シンポジウムも様々な企画がありますので、みなさまにとって実りある第32回大会となることを祈っています。

副幹事長のご挨拶「副幹事長ご挨拶」

地球環境委員会 副幹事長 岡 和孝（国立環境研究所）

皆様、こんにちは。国立環境研究所の岡 和孝です。地球環境委員会 副幹事長を務めさせて頂いて2年目を迎えました。同様に、地球環境研究論文編集小委員会 幹事長、表彰小委員会 委員、地球環境シンポジウム大会実行小委員会 委員も2年目になります。右も左も分からない中でのスタートでしたが、皆様にご指導頂きまして、ここまで辿り着くことが出来ました。誠にありがとうございました。

さて、まずは第32回地球環境シンポジウムについてご報告させて頂きます。今年度は70件の研究論文（特集号）の投稿があり、7月8日開催の第3回編集小委員会におきまして論文審査が終了しました。著者の皆様には投稿頂きましたことに、査読者、編集委員の皆様には論文審査にご協力頂きましたことに感謝申し上げます。また、研究報告につきましては、47件の投稿がございました。併せて感謝申し上げます。さて、研究論文については、本年度から



Editorial Manager (EM) を用いた投稿に変更になりました。投稿された著者の皆様、査読者、編集委員の皆様、EMの使い勝手は如何だったでしょうか。地球環境研究論文編集小委員会 幹事長としましては、非常に有用であると感じた一方で、地球環境委員会用にカスタマイズ出来ないもどかしさ等も同時に感じた所です。また一部の委員からは改善に向けたご要望も頂きました。今後より利便性の高い投稿システムになるよう、土木学会とも連携の上、改善を目指していきたいと思います。

本年度のシンポジウム（9月24日～26日）は、熊本県立大学での開催となります。大会実行小委員会の岩見 麻子委員長、副委員長の糠沢 桂委員をはじめ、天野 弘基委員、鈴木 章弘委員、佐藤 琢磨委員、中川 啓委員、中畠 一憲委員、そして関係者の皆様とともに、シンポジウム開催に向けて鋭意準備を進めているところです。また本シンポジウムの開催に併せて、一般公開シンポジウム、若手勉強会、そしてエクスカッションも開催される予定です。詳細につきましてはWEBサイト（<https://committees.jsce.or.jp/global/node/86>）でご確認頂くとともに、参加に向けた関係者への周知、並びに皆様の積極的なご参加をお願い致します。

話題は変わりましたが、地球環境研究論文編集小委員会における検討課題の一つとして、特集号における英語論文の扱があります。現在、土木学会の方でEmerging Sources Citation Index (ESCI) 申請に関する提議がされているとのことで、現状では英語論文のみがESCI申請対象のようです。地球環境委員会の研究論文でも英語論文が投稿されていますので、その取扱いについて地球環境委員会としての回答が求められています。ESCIの対象となれば、インパクトファクターが付与される可能性がある一方で、日本語論文と英語論文での投稿システムのダブルスタンダード化への対応や、インパクトファクター付与に伴い海外

から投稿があった場合に、必須としているシンポジウムでの口頭発表をどうするか等、さまざまな課題を解決する必要があります。また、今後遅かれ早かれ日本語論文でも同様の議論が生じるでしょう。このような課題は、単に投稿システムとしてのみならず、地球環境委員会の今後の在り方とも密接に関係します。地球環境委員会の今後の在り方について、委員の皆様と是非議論させて頂ければと思います。

ここで、自らの研究についても少し触れさせて頂きたいと思います。昨年に引き続き 2024 年も非常に暑い夏になりました。熱中症救急搬送数をみると、2024 年も昨年と同規模で推移しており、最終的には 9 万人程度になると見込まれます。熱中症リスクを軽減するべく、政府は新たに「熱中症特別警戒アラート」及び「指定暑熱避難施設（クーリングシェルター）」に係る取組を 2024 年 4 月に開始しました。かかる状況下、私の研究としまして、暑熱健康の現状分析や将来予測、地域との共同による暑さ指数（WBGT）観測等を行っています。今後より直接的に熱中症リスク軽減に繋がる研究にも取り組みたいと考えています。幸い本年度、内閣府 BRIDGE「産官学連携による熱中症リスク低減のための先端的な暑さ指数計測技術の社会実装」に取り組むことになりました。地球環境委員会の関係者におきましては、産官学連携も盛んでありますところ、是非皆様のご経験も参考にさせて頂きましたら幸いです。

最後に、地球環境委員会 副幹事長としての、あるいは地球環境研究論文編集小委員会 幹事長としての任期を半年少し残すところとなりました。第 32 回地球環境シンポジウム開催に向けて、さらには地球環境委員会を盛り上げるべく、引き続き委員会活動に尽力していきたいと考えています。今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い致します。

第32回地球環境シンポジウムのご案内

実行委員会 委員長 岩見 麻子（熊本県立大学）

第32回地球環境シンポジウムを熊本県立大学において9月24日（火）～26日（木）の3日間で開催することとなりました。今回は研究論文53報と研究報告47報（口頭発表13報，ポスター発表34報）の合計100報の研究成果が発表される予定です。研究成果を投稿くださった皆様に心から感謝申し上げます。

第32回地球環境シンポジウムでは上記の研究成果の報告に加えて、一般公開シンポジウムとエクスカージョンの開催を企画しています。

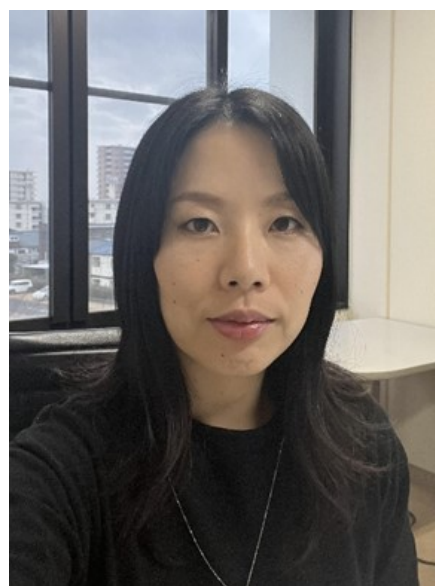
同シンポジウムを開催する熊本県では、2020年に県南部の球磨川流域に河川の氾濫や土砂災害など甚大な被害をもたらした歴史的な大災害「令和2年7月豪雨」が発生しました。蒲島前熊本県知事は、球磨川流域の治水の方向性として、河川の整備だけでなく遊水地の活用や森林整備、避難体制の強化を進め、さらに自然環境との共生を図りながら流域全体の総合力で安全・安心を実現していく「緑の流域治水」の考え方を同年11月に表明しました。一般公開シンポジウムは「地球温暖化時代の流域治水」と題し「緑の流域治水」の核となるプロジェクトの代表を務める島谷幸宏氏（熊本県立大学）をはじめ、風間聡氏（東北大学）、嶋田剛士氏（国土交通省九州地方整備局）、佐藤琢磨氏（熊本県立大学）の4名にご講演いただき、地球温暖化や人口減少が進む中での流域治水や多主体との連携のあり方について、パネルディスカッションで議論する予定です。

また、エクスカージョンは熊本WGの活動に協力いただいているフィールド、黒川温泉地域で「サーキュラーエコノミーを軸とした地域づくりの見学・体験」を企画しています。黒川温泉観光旅館協同組合から同地域の歴史や概要をご紹介いただくとともに、南小国町役場から同町のゼロカーボン実現に向けた取り組みやバイオマス産業都市構想に関して話題提供いただく予定です。また、南小国町の森林の間伐材を利用したオリジナルコースター作りの体験も計画しています。

地球環境シンポジウムおよび一般公開シンポジウム、エクスカージョンへの皆様のご参加をお待ちしております。

第32回地球環境シンポジウム実行小委員会：

- 委員長 岩見 麻子（熊本県立大学）
- 副委員長 糠沢 桂（宮崎大学）
- 委員 天野 弘基（東海大学）
- 委員 鈴木 章弘（北海道大学）
- 委員 佐藤 琢磨（熊本県立大学）
- 委員 中川 啓（長崎大学）
- 委員 岡 和孝（国立環境研究所）
- 委員 中嶋 一憲（兵庫県立大学）



開催概要

1. 主催：公益社団法人 土木学会（担当：地球環境委員会）
2. 日時：2024年9月24日（火）・9月25日（水）・9月26日（木）
3. 場所：熊本県立大学（熊本県熊本市東区月出3-1-100）
4. プログラム：シンポジウムの詳細や最新情報は下記の地球環境委員会ホームページ（<https://committees.jsce.or.jp/global/>）をご覧ください。

日付	午前	午後
9月24日（火）	—	開会式，研究発表，ポスターセッション，若手勉強会
9月25日（水）	研究発表	一般公開シンポジウム
9月26日（木）	研究発表，閉会式・論文賞表彰	エクスカージョン
9月27日（金）	エクスカージョン	

5. 第32回地球環境シンポジウムの参加費（締切日時）：

一般（会員）：11,000円（税込、9月19日17時まで）

一般（非会員）：13,200円（税込、9月19日17時まで）

学生：0円

注：当日参加受付の場合、それぞれ1,100円（税込）が加算されます。（学生除く）

締切日以降の事前受付はいたしません。行事当日に会場にて参加申込をして下さい。

※会場でもwebからの申込案内になります（クレジットカード決済）。現金支払はございませんのでご注意ください。

6. 一般公開シンポジウム：「地球温暖化時代の流域治水」

基調講演：島谷幸宏氏（熊本県立大学）

講演：風間聡氏（東北大学）

講演：嶋田剛士氏（国土交通省九州地方整備局河川部河川計画課）

講演：佐藤琢磨氏（熊本県立大学）

パネルディスカッション

モデレーター：糠澤桂氏（宮崎大学）

パネラー：講演者

7. 若手勉強会：

日時：9月24日（火）17:00～18:00

場所：熊本県立大学講義棟2号館SLC（予定）

参加費：無料

8. エクスカージョン：

日時：9月26日（木）～27日（金）

行先：黒川温泉（熊本県阿蘇郡南小国町）

テーマ：サーキュラーエコノミーを軸とした地域づくりの見学・体験

参加費：無料（宿泊費，食事代などは各自負担）

第31回地球環境シンポジウムのご報告

前実行委員会 委員長 白木 裕斗（名古屋大学大学院環境学研究科）

2023年9月19日（火）～21日（木）の3日間の日程で、滋賀県立大学において、第31回地球環境シンポジウムが開催されました。皆様のご協力のおかげで、無事に会期を終えることができました。ご参加いただいた皆様、ご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

今回は、研究論文46報、研究報告34報（口頭発表12報、ポスター発表22報）の合わせて80報の研究成果が発表されました。研究論文や研究報告（口頭発表）は10のセッション（地球環境（沿岸・エネルギー）、地球環境（水文）温暖化・水資源、環境保全・生態系管理、水物質循環と流域圏、脱炭素シナリオ1・2、防災・避難、自然災害1・2）に割り当てられ、各セッションで活発な質疑・討論が展開されました。



シンポジウム1日目の一般セッション終了後には、2022年度のシンポジウムから始まった「地球環境シンポジウム若手勉強会」が開催されました。30代までの若手の発表者を中心に30名強の参加者が集い、3名の学生・若手研究者からの話題提供と、話題提供に関連したグループディスカッションが行われました。終了後の若手懇親会も含めて大盛況な会となりました。

シンポジウムの2日目の午後には、「ネットゼロシナリオの実現可能性を考える」と題した一般公開シンポジウムを、環境研究総合推進費の支援を受けながら、対面・オンラインのハイブリッド形式で開催しました。ハイブリッド形式での一般公開シンポジウムの実施は初の試みでしたが、対面で約50名、オンラインで約80名の方にご参加いただきました。

一般公開シンポジウムでは、4名の皆様にご講演いただいた後、講演者4名にモデレーター1名、パネラー2名を加えた計7名の方々にパネルディスカッションを展開していただきました。

- 基調講演：横木裕宗 氏（茨城大学）「顕在化する気候変動の影響と適応策～沿岸域を中心として～」
- 講演：藤森真一郎 氏（京都大学）「気候変動緩和研究の最前線 ～ネットゼロの実現可能性を考える～」

- 講演：大城賢 氏（京都大学）「ネットゼロを達成するエネルギーシステムの定量評価」
- 講演：朝山慎一郎 氏（国立環境研究所）「ネットゼロシナリオの公衆認知～実現可能性と望ましさの観点から～」
- パネルディスカッション：
 - モデレーター：長谷川知子 氏（立命館大学）
 - パネラー：講演者、島田幸司 氏（立命館大学）、越智雄輝 氏（株式会社 E-konzal）

当日の講演の様子は、以下の YouTube からアクセス可能です。現在顕在化している気候影響についての包括的な講演から始まり、最先端の研究で議論されているいくつかのネットゼロシナリオの紹介・定量的な分析の結果の紹介に加えて、それらのシナリオの実現可能性に関するリアルタイムアンケート調査も実施されています。まだご覧になっていない皆様はもちろん、一度ご参加いただいた皆様も、ぜひ、お手元の端末からアクセスしてみてください。



第32回地球環境シンポジウムは、2024年9月24日(火)～26日(木)にかけて、熊本県立大学での開催を予定されています。今年度は、エクスカージョンも計画されているとのこと、地域についても学べる貴重な機会になると想像しております。第32回シンポジウムも盛会となることを祈念しております。

委員だより v.12 「福島 WG の活動紹介」

地球環境委員会 委員 川越 清樹（福島大学共生システム理工学類）

令和5年度より福島ワーキンググループが設立され、活動ははじまりました。設立の経緯は委員会内の集中討議をきっかけにしていますが、察するにこのきっかけだけではなく2つの活動が起点に関わっていると思います。活動起点の1つめが第29回地球環境シンポジウムの一般公開シンポジウム「東日本大震災から10年、復興する福島の現在と将来」の開催です。シンポジウム自体が、コロナ禍という状況のため、直接顔合わせして議論を交わす機会ではなくオンラインの開催となりました。オンラインとはいえ本来であれば福島開催??せっかくなので福島の現状を知ってもらいたい...何か工夫をと当時の花崎幹事長、中畠副幹事長兼大会実行委員会幹事長と相談し、「福島で復興を進める場所に出向き、携わる人に会って取材するスタイルの動画を作成し、復興向かうための現地点を再確認するとともに発信し、課題を議論する」という試みをやってみました(写真1)。正直に言うと、福島の現状を発信する当初の目的云々よりも、インタビュアー、編集を進めている自分自身が復興に関わる現場と携わる人に接して刺激を受け、何よりも楽しかったという一言に尽きるなと思います。動画の云々は別に、パネルディスカッションに参加したコーディネーターの福島大学 小沢喜仁名誉教授をはじめ、パネリストの公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構 斎藤保理事長、産業総合研究所福島再生可能エネルギー研究所 古谷博秀所長、国立環境研究所地域協働研究拠点地域環境創造研究室 五味馨室長のご尽力もあり、福島の現状の課題と携わるあらゆる関係者の生の声を受け止め、福島という復興に向かったの地域貢献に対する具体的な再生エネルギー、情報、定住も含めたまちづくり、人材育成に関連したミライへの提言をまとえることができました。活動起点の2つめが福島県に関わる気候変動影響評価をすすめたアウトプットを得て、地域というスコープまで落とし込んだ成果があったことと思います。これら「地域貢献」、「気候変動」というキーワードでまとめられる2つの起点がワーキング活動に連動していると思っています。



福島ワーキングでは、現在まで培った気候変動の影響評価のアウトプットをアドバンテージとして活かしながら、「復興」、「過疎化」の諸問題を考慮して気候変動の緩和・適応と並走して自治体への「地域貢献」を目標に活動しています。特に、人的資源が確保できずに「適応策・緩和策を実践しにくい自治体」を対象に社会・経済活動を支える基盤を検討できるケーススタディの構築に取り組んでいます。個人的には、学会の関係者だけにとどまらずあらゆる関係者(交流人口、関係人口)となり、地域住民と諸問題を議論して、目的群を解消して自治体の地域貢献に資することのできる実装できる緩和策・適応策のケーススタディを創出することができればと思っています。なお、持続可能性を高めてミライにつなぐため交流人口、関係人口には若手の人たちが参加してもらいたいと切に思っている次第です。学生さん単独でも大歓迎です。2023年11月14,15日には第1回福島ワーキング集会を開催しました。研究会はいわきアオリスで行い川越の他、国立環境研究所気候変動適応センター気候変動適応戦略研究室 真砂佳史室長より「気

候変動影響の地域差や優先度解析手法の開発」ということで地域に焦点をあてた気候変動の影響方向についてご講演頂きました。あわせて、現地巡検では株式会社ふたばさんのご支援を受けて富岡町に訪問し、復興に向けての現在地点、将来展望を取材することができました(写真2参照)。また、活動は発展的に進めますが、今後は人口減少の大きな福島県奥会津地域での開催、また、地球環境委員会の政策研究小委員会との意見交換会を企画しています。



写真1 再生可能エネルギーの取材状況(第29回地球環境シンポジウムより)

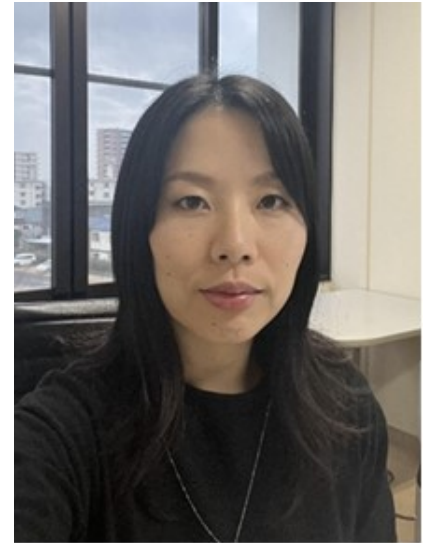


写真2 第1回福島ワーキング集会現地巡検(福島県富岡町夜ノ森駅周辺)

委員だより v.12 「熊本 WG の活動紹介」

地球環境委員会 幹事 岩見 麻子（熊本県立大学）

熊本県南小国町の黒川温泉地域におけるヒアリング調査を通して、観光業や畜産業、農業の従事者が「自分たちの仕事がどのくらい環境負荷を与えているか定量的に知りたい」また黒川温泉観光旅館組合が「温泉資源を守るためにそのメカニズムを把握したい」というニーズを持っていることがわかりました。このニーズに応えるべく、土木学会地球環境委員会のメンバーを中心に、ニーズに対応する知見や技術といったシーズを持つ研究者を募り、多様な所属・専門の研究者9名からなる「熊本ワーキンググループ（以下、熊本WG）」を2023年9月に立ち上げました（表1参照）。図1に示すように、熊本WGはテーマ1から3は観測やヒアリング調査によって地下水位や水質、食品残渣の発生量、健康指標などの地域情報を取得、それらを分析することで黒川温泉地域が求める科学的知見を得ることを目的としています。その際、協力旅館とのマッチングや科学的知見の共有、具体的な施策の検討・立案をテーマ4がサポートする体制となっています。



これまで、研究チーム全体での打ち合わせに加えて、黒川温泉地域の関係者を交えたキックオフミーティングを実施しています。研究チーム全体の打ち合わせでは、黒川温泉地域が持つニーズを共有し、参画メンバーの持つ知見・技術と興味関心を鑑みて図に示した4つの研究テーマを設定した上で、研究プロジェクトの進め方や具体的な調査内容を議論しました。

一方、黒川温泉の関係者を含め他キックオフミーティング（写真1参照）では、研究チームから4つの研究テーマそれぞれが何をしようとしているかや、アウトプットのイメージ、地域に協力を求めたい事項について報告するとともに、黒川温泉地域から現在の取り組みや今後の構想について説明を受けました。調査に協力が得られることを確認した上で、調査の実施に向けて各テーマと関心を持つ旅館などでマッチングが必要であることなど、具体的な進め方についても議論しました。

各テーマに協力いただける旅館とのマッチングを経て、今年8月には黒川温泉の温泉でテーマ1の初回の水質調査が実施されました（写真2参照）。毎月1回の調査を継続し、現在の温泉の水質や季節変動を把握し、協力旅館にフィードバックしていく予定です。9月にはテーマ2のヒアリング調査も予定されており、黒川温泉関係者の協力のもと、順調に現地調査が始まりつつあります。

表1 熊本WGの参画メンバーと担当テーマ

氏名	担当	所属機関	役職
天野 弘基	テーマ1	東海大学	助教
糠澤 桂	テーマ1	宮崎大学	准教授
中川 啓	テーマ1	長崎大学	教授
風間 聡	テーマ1, 3	東北大学	教授
吉川 直樹	テーマ2	滋賀県立大学	講師
岩見 麻子	テーマ2, 4	熊本県立大学	准教授
吉田 惇	テーマ3	東北学院大学	准教授
中島 一憲	テーマ3	兵庫県立大学	教授
木村 道德	テーマ4	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター	専門研究員

※ 各テーマの内容は図1参照

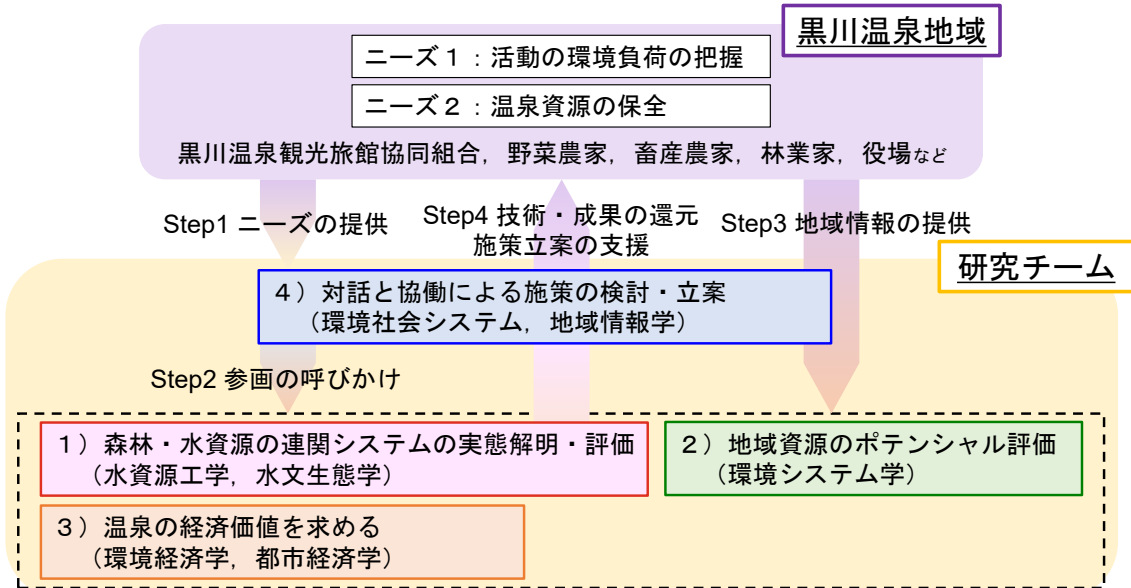


図1 熊本WGの全体像



写真1 キックオフミーティングの様子 (2024/3/11)



写真2 黒川温泉での水質調査の様子 (2024/8/9)

委員だより v.12 「政策研究小委員会の活動紹介」

地球環境委員会 委員 政策研究小委員会 委員長 山崎 智雄 ((株)エクス都市研究所)

荒巻委員長の後を引き継ぎ、2023年度から、小委員会委員長を務めております、エクス都市研究所の山崎です。

政策研究小委員会は、地球温暖化問題等に対して、土木関連分野における政策研究の方向性を明確化し、さらに土木業界の貢献の方途について考究することを目的として、2010年度に発足。2013～2019年度には、地球環境シンポジウムにおける特別セッションの企画等も行ってきていました。

その後はコロナ禍もあり、暫くは活動を実質休止していましたが、2024年度から再開し、当面の間は年に数回、「行政等と研究者や民間事業者との接点を作る」という意味あいで、メンバーに負荷がかからないレベルということを念頭に計3回のセミナー+懇親会を開催してきました(下表)。事務局運営には、鳥取大学の宮本委員、アジア航測の藤原幹事、エクス都市研究所の尾崎幹事にも協力してもらっています。

各回の参加者は20～30名で、半数程度が懇親会(会費制)まで残ってくれています。セミナー講師にも懇親会まで、できる限り参加頂き、かなり濃密な意見交換を行っています。



表 2023年度以降に開催したセミナー・懇親会の概要

日時	セミナータイトル	講師	セミナー会場	セミナー参加者数	懇親会参加者数
2023. 8. 4 16:10～18:00 (その後懇親会)	(仮題) 脱炭素・GXに関する最近の政策動向と土木工学に期待するもの	環境省 地球環境局 地球温暖化対策課 地球温暖化対策事業室 統括補佐 福井 和樹様	航空会館 501 会議室	21名	13名
2023. 12. 1 16:10～18:00 (その後懇親会)	1) 生物多様性国家戦略と国内外の動向 ～気候変動対策との統合的対応の必要性～ 2) OECMと自然共生サイト ～民間活動の促進に向けて～	1) 環境省 生物多様性戦略推進室 室長補佐 松永 暁道様 2) 環境省 自然環境計画課 調整官 石川 拓哉様	エクス都市研究所 会議室	27名	14名
2024. 4. 24 16:10～18:00 (その後懇親会)	カーボンニュートラルに向けて都市分野でやるべきこと(仮)	国土交通省 都市局 総務課 都市環境室 課長補佐 今 佐和子様	建設技術研究所 東京本社(スカイゲート) 5階会議室 A	24名	10名

当初の目論見では、小委員会として何らかの政策提言などに繋げていけないか、と考えていたところもありますが、現時点ではそこまでは至っておりません。ですが、参加者にとっては、最新の政策動向にざっくばらんに触れられる機会となっています。何はともあれ、年数回、普段あまり一緒に飲めない人たちと、あれこれと情報交換するのも、それなりに有用ではないか、などとも思う次第です。

委員、幹事はもちろん、一般の方の参加も歓迎ですので、奮ってご参加ください！！



セミナーの様子



懇親会の様子

ニュースレター第61号発行ご挨拶 「豊かな自然、豊かな科学、豊かなヒト」
地球環境委員会 委員 広報小委員会 委員長 大西 文秀 (ヒト自然系 GIS ラボ)

ニュースレター61号では、委員だよりとして、ワーキンググループや小委員会の活動紹介について寄稿いただきました。一昨年の59号では、委員会の全ての皆様に寄稿いただき、地球環境委員会設立30周年記念号を発行することができました。また昨年は、節目となる60号を発行することができました。皆様のご支援の賜物とお礼申しあげます。



世界中で、気候変動の影響が厳しさを増し、生活や生存に深刻な被害をもたらしていますが、我が国では、元旦に能登半島地震が発生し、8ヶ月以上経た現在も復興活動が継続されています。M7.6、最大震度7を記録した地震により、海底総延長85kmが隆起して陸地になったと解析されています。また、8月8日には、日向灘で発生した地震(M7.1、最大震度6弱)により、南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)が初めて発表されました。プレートがぶつかり合い、断層や海溝やトラフでの地震災害が多発してきた地震大国・日本に見合った、防災や食糧、エネルギーや資源などの包括的な取組みが求められます。

また、例年、ニュースレターの編集や、地球環境シンポジウムの準備や開催の時期は、猛暑や豪雨災害や台風襲来の時期と重なり、年々その傾向が強くなっている様に感じます。この夏の猛暑は凄まじいものがあり、熱中症被害が急増する中、東北地方では豪雨により大きな洪水災害が発生しました。テレビでの災害報道では、地球環境委員会の風間聡委員長が解説されていました。さらに、台風10号は、8月22日にマリアナ諸島近海で発生後、当初の進路予想より西進し、高い海面温度や遅い進行速度などで、非常に強い勢力になりました。8月29日に鹿児島県薩摩川内市付近に上陸後、極めて遅い速度で九州や四国を横断し、紀伊半島付近へと進みました。上陸台風としては過去最強クラスの台風10号により、進路地域のみならず、台風から離れた、関東や東海地方にも豪雨やゲリラ雷雨が長期にわたり発生し大きな災害が続きました。気候変動により、今後さらに、台風は大型化するとの懸念が報告されています。

近年のこの様な、年々顕著になる気候変動による影響や被害の増大を考えると、この先の不安や恐怖心を抑えることはできません。また、その要因のひとつとなる地球環境問題を引き起こしてきた私たち以前の世代の一員として、次世代への申し訳なさを感じずにはおれません。自然の生きものは自らの棲み家を大切にしますが、何故か私たちヒトは環境問題を生み、気候変動を引き起こしてきたと言えるのでしょうか。自然の生きものとヒトとの違いは何だろう?と考えると、ヒトという生きものは、環境や資源や利益、また、社会や組織に対する、権利化や私物化や独占化といった、ヒトの性とも考えられるヒトの属性が、大きく関わっていると想われます。こうしたことが、悪循環を生み、堂々めぐりを繰返し、改善が進まない要因になっているのではないのでしょうか。また、戦争や紛争による、環境破壊や悲劇がいつの時代になってもなくならず、繰り返されている事とも共通点を感じます。

豊かな自然、豊かな科学、豊かなヒト、この実現により、豊かな未来が訪れるのです。

■ 地球環境委員会 令和6年度の構成

■ 委員長・副委員長・幹事長・副幹事長

委員長名	氏名	所属
委員長	風間 聡	東北大学
副委員長	津旨 大輔	筑波大学
幹事長	中嶋 一憲	兵庫県立大学
副幹事長	岡 和孝	(独)国立環境研究所

■ 顧問

委員長名	氏名	所属
顧問	青山 俊介	(株)エックス都市研究所
顧問	北田 敏廣	豊橋技術科学大学・名誉教授
顧問	松岡 譲	京都大学・名誉教授
顧問	太田 幸雄	北海道大学・名誉教授
顧問	山田 正	中央大学
顧問	松下 潤	芝浦工業大学、中央大学
顧問	市川 陽一	龍谷大学
顧問	河村 明	首都大学東京
顧問	米田 稔	京都大学
顧問	横木 裕宗	茨城大学

■ 委員・幹事

委員長名	氏名	所属
委員	大西 文秀	ヒト自然系GIS ラボ
委員	中條 壮大	大阪公立大学
委員	島田 洋子	京都大学
委員	藤田 昌史	茨城大学
委員	川越 清樹	福島大学
委員	馬場 健司	東京都市大学
委員	田中 良英	関西電力(株)
委員	手計 太一	中央大学
委員	宮本 善和	鳥取大学
委員	武藤 慎一	山梨大学
委員	山崎 智雄	(株)エックス都市研究所
委員	板川 暢	鹿島建設(株)
委員	小林 健一郎	埼玉大学
委員	中川 啓	長崎大学

委員長名	氏名	所属
幹事	岩見 麻子	熊本県立大学
幹事	小野 桂介	東北工業大学
幹事	白木 裕斗	名古屋大学
幹事	坪野 考樹	(一財)電力中央研究所
幹事	花崎 直太	(独)国立環境研究所
幹事	糠澤 桂	宮崎大学
幹事	長谷川 知子	立命館大学
幹事	藤森 真一郎	京都大学
幹事	山田 朋人	北海道大学
幹事	大城 賢	京都大学
幹事	尾崎 太朗	(株)エックス都市研究所
幹事	田村 誠	茨城大学
幹事	藤原 真太郎	アジア航測(株)
幹事	吉田 惇	東北学院大学

2024年9月1日時点
 下記、地球環境委員会ホームページより。
<https://committees.jsce.or.jp/global/>

■ 地球環境委員会からのお知らせ

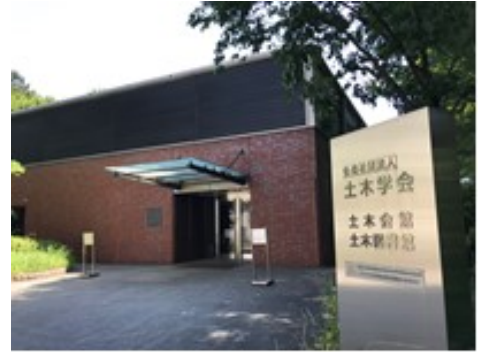
●第32回地球環境シンポジウム

★土木学会のホームページで参加申込を受付

会場：熊本県立大学（熊本市）

日時：令和6年9月24日（火）～9月26日（木）

皆様の参加をお願い申し上げます。



●令和6年度土木学会全国大会 第79回年次学術講演会【終了】

会場：東北大学 川内北および川内南キャンパス

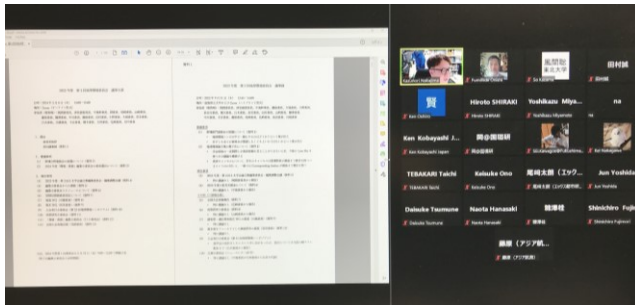
仙台国際センター

ホテルメトロポリタン仙台

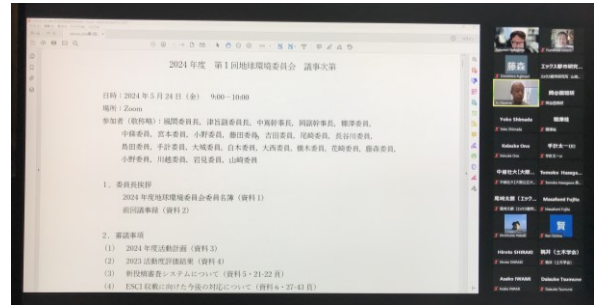
日時：令和6年9月2日（月）～6日（金）

●地球環境委員会 開催委員会

令和5年度第3回委員会が本年3月4日にオンラインにより、令和6年度第1回委員会が5月24日にオンラインにより開催されました。令和6年度第2回委員会は、第32回地球環境シンポジウムに合わせ、9月25日（水）に熊本県立大学にてハイブリッド開催の予定です。



令和5年度 第3回地球環境委員会



令和6年度 第1回地球環境委員会

【編集後記】

地球環境委員会ニュースレター、第61号をお届けいたします。

気候変動による猛暑や豪雨災害、大地震や戦争や紛争により、不安な年が続いております。

9月には、第32回地球環境シンポジウムが、熊本県立大学にて開催されます。

たくさんの皆様のご参加ご支援をお願い申し上げます。

令和6年9月

発行：(公社)土木学会 地球環境委員会
〒160-0004
東京都新宿区四谷1丁目
外濠公園内

●地球環境委員会についての問合せ先
地球環境委員会 担当事務局

TEL:03-3355-3559, FAX:03-5379-0125

●ニュースレターについての問合せ先
第61号編集責任者 大西文秀

E-mail : fonishi@m3.kcn.ne.jp